

# NHK文研フォーラム2018

## これからの“放送”はどこに向かうのか？ ～民放連会長にきく～

### はじめに

村上： 去年秋から内閣府の「規制改革推進会議」では放送をテーマにした議論が続いています。放送の未来像が政治課題化しているとも言える中、放送事業者自身が広く社会に向けて放送の未来像を示すべきなのではないかと思い、本日は民放連の井上弘会長にお越しいただきました。

### 「TVer」について

村上： 井上会長が就任された2012年は、まさに放送事業者の配信サービスが一気に拡大してきた時期。今日までの激動の会長任期6年を振り返っていかがですか？

会長： 私の任期は6月8日までですからもうあとわずかです。地デジが終わった後、ケーブルテレビの同時再放送やラジオの難聴取解消対策などを行っていたら、いよいよインターネットの存在感が増してきました。これに対処しないと、ということで取り組んできましたが、十分に出来たかどうか。

村上： 事前に参加者の皆さんから井上会長への質問を募集しました。質問で最も多かったのが、在京民放キー局を中心とした無料見逃しポータルサイト「TVer」についてです。井上会長のイニシアチブがなかったらこの民放横断のサービスは存在していないのではないか、と言われますが、開始するにあたりどんなご苦労がありましたか。

会長： まず私は根本的に、ネットとテレビは媒体として違うと思っています。画面に映してしまうとネットでもテレビでも同じように見ることができますが、テレビは一カ所から多数に送信するものでリーチが一番大きい。そのかわりネットのように自由自在には送受信できない。送信設備も人材も機材も資本も必要です。一方、ネットは非常に気楽にポン、ポンと発信出来る。この違いが非常に大きいと思うんです。

今ネットではフェイクニュースや炎上などの問題も起きていますが、見ている人間を特定出来るのか、テレビに出来ない利点もあります。そういう中で、ネット！ネット！と、テレビ局側が浮き足立っているところもあるとは思いますが、何らかの形でテレビがネットとの関係を持ち、ネットとはどういうものか、ある程度皆が理解しないと無理だと思いました。

またその頃、自動的に1週間分まるごと録画が出来て、番組を自分で拾い出せるような録画機能付きのテレビが発売されるということもあり、そうなったら大変だということも考えました。

村上： 「全録」ですね？

会長： そうです。それが広がったら視聴者にCMをとばして番組を見られてしまう。これは民放にとって決定的なことです。CMを観てもらえないと商品にならない。ですので何とかして録画に対抗したサービスを商品化することが出来ないかと思い、それならばネットでやるしかないということになりました。

その当時、各社はすでに配信ビジネスをやっていました。ただ、各局毎だとやはり弱い、一緒にやれば多くのコンテンツが集まり見てくださる方も増えるのではと考えました。もう一つは、一緒にやれば広告の問題も解決できるのではないかと考えました。ネットでセールスをする単価とテレビでセールスする広告単価は全然違うんです。単価的にいえばテレビの方が高い。だから営業はなかなか安い単価のネットをセールスしてくれない。しかし、テレビで番組を放送したあとすぐにネットで見られるようにしたら商売になるかなと思ひ、広告代理店の意見も聞き、これならなんとかなるかなと思ひました。

それからは各社の社長さんを訪ね、「将来のことを考えてお互い競争してるのは分かるし自分の商売があるというのは分かるけれど、皆でまとまればそれだけ見てくれる人も多くなるし、チャンスも増えるのではないかと」と言って回りました。すぐに賛成してくださった局もありますし、「いやあ・・・」と仰った局もありましたけど、何度かお話をしているうち、皆さんにご了解いただきスタートしました。

一番苦労したのは著作権に関することでした。強力なプロダクションに「ネット配信はNO」と言われてしまうと、そのプロダクションに所属している俳優が出演している番組はネットには出せないんで

すよ。テレビで視聴率は取れていて、視聴者の反響も良いのに、あの人が出演しているから配信できない・・・正直に言えばこれが一番困りました。著作権をお持ちの皆様とは何度もお話をしました。ネットに配信することがプラスになる、ということを読得するのに1年ぐらいかかりました。これが一番苦労したことかも知れません。

そして再三、NHKにも一緒にやらないか、と上田会長にお願いしています。NHKが参加してくれば全国的な広がりになりますし、強力なソフトもお持ちです。NHKに是非参加して欲しいというのが私の最後のお願いです。

**村上：** NHKが当初見逃し配信を始めた時には、NHKが無料で配信を行うのは民業圧迫である、という民放のご意見がありました。それに関しては、今は・・・

**会長：** それに関しては、各局ともいまは皆行っているし視聴者も見逃し配信を見られているわけです。NHKは同時配信に非常に熱心ですが、私はあまり同時配信には関心が・・・ない、というとおかしいですが、テレビで放送しているのに小さい画面で見るとかなあと。スポーツ試合の結果を見たいという人はいるでしょうけど、そうでもない限りそんなに意味はないのでは、と個人的には思っています。

## 同時配信について

**村上：** 次に同時配信の話に移ります。現在NHKは、常時同時配信を実施するための放送法改正を要望しており、総務省の「放送を巡る諸課題に関する検討会」でも議論が続いています。検討会では「NHKだけでなく民放も同時配信を実施すべきではないか」「NHKと民放の共通プラットフォームがよいのではないか」などの意見も出されましたが、民放連および民放各局は、常時同時配信の実施は難しいとの見解を示しており、また法改正を要望するNHKに対しても様々な意見をいただいています。

**会長：** 公式に民放連の立場で言えば意見は一つも変わっていません。ネット配信ではリーチが足りない。テレビが表にあるのに裏で同時配信をしてもリーチは足りないだろうと思うんです。在京各キー局の社長がみな言っているビジネスモデルが見えないという最大の理由は、このリーチの問題なんです。規制改革推進会議を含めて、ここを理解していただきたいと思っています。

**村上：** 将来にわたってそうでしょうか。時間軸をもうすこし遠くに設定したとしたらどうでしょうか。

**会長：** どうでしょうか。配信コストなどもあるでしょうし。もちろん技術が進めばそれも安くなるでしょうし、どんどんネットがテレビに近づいてくることはあるかもしれませんが、それが飛躍的に、例えばネットで一度に100万人とか200万人規模の人たちにコンテンツを送信できるかということ、今の状況だとまだちょっと時間はかかるんじゃないかなと思います。だから今あまり慌ててネットとテレビのすみ分けに関して議論することも必要ないし、強引に一緒にするような議論をすることもない気がします。

**村上：** NHKでは同時配信の実験を実施していますが、そこでは利用していただけなかった4割程度の人の中には、NHKと共に民放の番組も一緒に見られたらいいという要望がありました。また、放送文化研究所の世論調査では、1つのアプリ、サイトで同時配信を利用できるなら、NHKと全ての民放と一緒にあることが望ましいという回答も半分程度ありました。

**会長：** 民放のことだけを言えばコスト的に合わないだろうと思うのです。私も営業が長かったのですが、同時配信でスポンサーがその分を払ってくれるかということ、ちょっとどうかな、と思います。ネットでは誰が見たかというのがある程度分かりますからセールス上有利だというのは確かですけど、今すぐスポンサーもネットと放送が入れ替わるほどにはならないと思うので、私はまだ同時配信の実施は早いのではないかと思います。時代が変わり、動画視聴に慣れ親しんだ方々が視聴者の大半を占める時代になれば変わると思いますが、いくら時代の変化が早いといっても、あと10年くらいはかかるのではないかと思います。

**村上：** ラジオについては、実験という形ですけども、「radiko」にNHKも一緒することで、ユーザーの評判もいいみたいなのですが、テレビとラジオ基本的には違うというご認識ですか？

**会長：** そうですね、ラジオのほうが、非常に手軽にできるという点ではテレビとは違うと思いますし、著作権もテレビと比べて比較的クリアがしやすいのではないかと思います。NHKは実験でやっていますが、今後もしもああいう形を取ればいいなと思います。ただ先ほど申し上げたように、テレビとラジオだと同時配信を実施するにもお金の規模が違いますんでね・・・。

**村上：** ユーザーもそこまで望んでいない、という感じでしょうか？

**会長：** 私はそう思っています。寝っ転がって見たいとか、手元で見たいとか、一人で見たいとか、そういう需要はもちろんあると思いますが、テレビの画面で放送しているものを小さい画面で同じものを見るということをごまかすのか、という疑問です。

**村上：** 少々聞きづらいのですが、放送法を改正して、NHKだけが常時同時配信を実施するという点についてはどうお考えでしょうか。

**会長：** 何度も申し上げている民放連のスタンスがあります。民放連としては、受信料問題をきちんと整理してほしいとか、なぜやるのかとか、上限はどのぐらいの予算をかけるのかとか、どういうふうにするつもりなのか、とか色々伺っているのですが、それに対して今のところはっきり回答をいただけていないように思っております。

**村上：** NHKも2019年度に開始を要望するにあたって、開始当初のサービスの姿とか、地域制御をしていく等の考え方を示していると思うのですが、これまでのやり取りの中で、NHKの姿勢も少しは変わってきていると受け止められていますか、まだ不十分だと思っていらっしゃいますか？

**会長：** まだ腑に落ちてないところはあります。ただ、民放の中でも地方局のことを気になさってる方が多いんですけど、個人的には地方のほうが影響は少ないのかなと思っています。同時配信を見る方の層が地方のほうが少ないのではないかとはいえますけど。でもまあ、地方局にとっては非常に脅威であることは間違いありません。

## 規制改革議論について

**村上：** 次のテーマに、電波制度改革、規制改革の話に移ります。規制改革推進会議では、放送用に割り当てられている帯域の有効活用に関する議論が去年の秋から一気に出てきました。放送事業者は割り当てられた帯域を十分に活用できていないのではないかと、非放送事業者にも活用の道を開くべきではないか、という趣旨の意見が出ています。この議論をどういう風にご覧になっていますか？

**会長：** 帯域活用は貴重な電波ですから当然のことです。我々も今度4K放送を実施する時もそうですが、帯域の有効活用については協力していますし、これからも協力はしていくのは変わらないと思います。ただこれから一番大きいのはテレビのクレディビリティ、信頼性です。今も一所懸命やっておりますけれど、それをもっと我々自身がしっかり考えていなければいけないと思います。これだけ電波を割り当てているのに十分な役割を果たしていないのではないかと、議論の背景にはそういうところがどこかにあるんだと思います。

**村上：** 国民にとって放送とは、蛇口をひねれば出てくる水のような感じなんだと思います。存在が当たり前になっている。総務省の検討会の議論でも、「放送事業者が公共的役割を果たしているというのはよく分かるけれども、もっと国民にきちんとアピールをすべきであり、その努力はしてるんですか？」という問いかけがありました。民放連としてはこのあたりはどうお考えなのでしょう。

**会長：** テレビは娯楽媒体であり情報媒体でもあります。情報媒体としてのテレビはクレディビリティを確保しなるべく早くお伝えする、隠さないというのも大事でしょうし、公平性も大事です。これらはみな放送法に書いてありますし、我々もみなそう思っているわけですから、放送法に沿って今後もやっていくことになると思います。娯楽媒体としてのテレビは、見ていて面白いな、この番組があるから今日は早く帰ろうと思ってくれる人たちがいて、必要だ、欠かせない、と思ってもらえるといいんですが、ここがちゃんとできているかと言うと、みんな同じような内容の番組をやっているのではないかと、などの批判もあります。こうした批判も意識した上で、自分たちのテレビをどういうふうにしていくのかを



考えるべきだと思っています。これは次期会長の久保さんの一番大きいテーマだと思います。久保さんにぜひリーダーシップをとってもらいたいです。

**村上：** 最近では報道と情報番組の境がなくなってきました。情報番組が、例えばインターネットの情報をそのまま紹介して色々な問題も生じています。ジャーナリズムと娯楽ときっちり分けられない、“間”の領域が広がってきている感じがしますが、その辺における放送の信頼性についてはどう考えればいいのかでしょうか？

**会長：** その辺が一番突かれるところだと思うのです。だからこそ、そこでの信頼性が大事だと思うんです。ワイドショーか情報番組か、どこが境目なのかはよくわかりませんが、この種の番組の出現で、テレビ自身はとてよくなったと思います。電気紙芝居と言われた昔の時代に比べれば、テレビは国民の皆さんに有効な情報を出していると思います。いつも四角四面のニュースで背広を着た人が出てきてニュースを読むというスタイルだけでなく、みなさんに親しんでいただける形でニュースを伝達していくという手法を考え出したというのは、私はいいことだと思います。また、ほとんどの放送局が情報番組は生で放送しているんです。そうすると、不測の事態とかがあった時にも臨機応変に対応できる。そうした意味でも、情報番組は貴重だと思います。ただ、観てもらいたい、という気持ちが先に立ちすぎると批判されるものになるのかな、と思っています。

**村上：** この信頼という話に関連しますが、安倍総理が2月6日の衆議院の予算委員会で、「放送もネットも見ている人にとっては差がなくなっており、放送にのみ規制・規律があるこの状態がこのままでいいのかという意見もある。放送法どうするのかという問題意識をもっている。」と発言しています。この発言についてはどう捉えたらいいのでしょうか？

**会長：** 私は直接伺っていないから分かりませんが、総理のお考えでは、画面で見れば同じではないかということをおっしゃっているのではないかと思います。しかし、放送は画面に出すまでに、色々な伝送設備を持ち、そのための組織を持ち、お金もかけて、画面に出す番組の信頼性というものを一所懸命に守ってきているわけです。それに対してネットは誰でも手軽に発信できます。これは確かに素晴らしい特性だと思います。そして、誰もが自由に発信できる、この自由さをもってしまったら困るわけです。「炎上の研究」という本を読みますと、炎上させている人はほんの少しの人数のようなことが書いてありました。しかしネットもだんだん成熟していけば、おのずとネットとはこういうものだという一つの概念ができてくると思うんです。そうすると、放送とネットのすみ分けが、視ている側の人にも自然にできるようになると思っています。今はちょうど混乱期ではないかと思うんですが、この何年か過ぎればネットはネットでこういうもんだなど、たとえば便利さや速報性はおそらくネットのほうが強い、一方で信頼感や放送のほうが強い、など、ユーザーが峻別できるようになってくる。

ただ、それまでの間は、ネットと放送を揃えて右だ左だと、どちらか一方にもっていくのはいけないのではないかと思います。つまり、放送法の項目をもうやめてしまえ、とかそういうことを早急にお決めにならないほうが、次の時代のためにいいのではないかなと私は思います。

## 放送の未来像について（ローカル民放）

**村上：** ここからは会場の皆さんからのアンケートを紹介しながらお話を伺います。

1つ目は、ローカル局の将来についてです。これから人口が減っていく中で経営が大変になっていくという危機意識がローカル局の皆さんの中には年々強くなってきています。2020年を超えた日本の状況を考えた時、ローカル局の将来をどうお考えですか。何をしていくべきだと考えていますか。

**会長：** ローカル局の問題は、取りも直さず日本全体の問題だと思うんです。東京一極集中、大都市圏集中で、地方の人口が減り、高齢化する、そういう日本社会の中にローカル局も一緒にいるわけですから。ただ地方における放送局の位置、存在意義というのは、東京あるいは大阪にいる人間が思うよりも遥かに大きいものがあるとも思うんです。

たとえば、青森県のある地域で外国人旅行者の数が驚くほど増加したという話がありますが、それは、自分達の地域を外国にどんどん紹介したからだと思います。そのような、地方経済自体を盛り上げていくことを、ローカル局も地域と一緒に考えてくべきだと思います。また、富山県では県会議員の不正を熱心に追いかけて、それを放送して大きな反響を呼んでいます。そういうテーマは、ローカル局でなければ分らないものです。ローカル局が独自に持っている取材力を活かし、その地域においてこの放送局は

やはり必要なんだ、と思ってもらうことが一番大事だろうと思います。ローカル局がこれからどう生きていくのかを考えることは、その地方がどうやって生きてくのかを考えることと私は同じことだと思います。地域全体と密接に関わり合いながら、地域の繁栄の為にローカル局もその一員となってやっていく位の覚悟をしないとイケないと思います。

「俺らはどうなるんだ?」「NHKがネットに出てきたらどうなるんだ?」等、そういうことばかり言って、民放連になんとかしてくれと言うより、ケネディさんではないですけど、「国に何か求めるのではなくて、国の為に何をやるのか」と同じ発想で、ローカル局も地域の為に、自分たちが何をやるのかという事を一所懸命に考えて生きていくところに何か糸口があるのではないかと思います。

その上で、キー局もネットワークもありますから、その中でお互いに生きていく事を考えていくということになるのではないのでしょうか。

いまローカル局で経営に当たられている方々が、とりあえず自分の代は生きられる、だからまあいいやと考えることを止めてしまっていないのでしょうか。辛いけど、自分の代で辛い事をちゃんとやるという覚悟をしてもらわないと、ズルズルいってしまい終わりにになってしまうのではないかなという気も致します。だから結局は経営者の自覚の問題ではないかなと思いますが。

**村上:** 井上会長もTBSで社長をつとめられてきました。変化の時代の中の経営者の資質とはどういうものなんでしょうか。

**会長:** やはり辛いことというか、嫌な事、嫌な事に向かって頑張るといことしかないんじゃないんですか。

**村上:** 井上会長はそういう経営者でしたか?

**会長:** 私の評価は人にしてもらうもので自分ではできないですけど、ただ自分で、今やらなければ駄目だと思った時は、やるしかないんじゃないかなと私はいつも思っていました。それで出来たかどうかは別ですが努力はしてきました。

## 放送の未来像について (NHK)

**村上:** 次はNHKについてです。先ほど会長から言われたように、公共メディアという言葉がまだピンとこない、腑に落ちないというご意見は会場の皆さんからも多くありました。NHKに対して、叱咤激励も含めてご意見いただければ幸いです。

**会長:** NHKと我々は二元体制でこれまで一緒にやってきているわけです。オリンピックの選手のように、お互いに競争して強くなる、そうしない限り放送業界は生き延びられないだろうと思いますし、NHKには頑張っ欲しいと思います。ただ正直な所、番組を制作する方々としては、少しでも多くの方に見せたいという気持ちは分かりますが、民放からすると視聴率を取りに走り過ぎているのではないかと、そんな所で民放と競争しなくてもいいのではないかと、もう少し中身の違うもので競争して、というような気が致します。特に午後7時のニュースの前にあれだけスポットを並べて番組宣伝をなさるのは、我々民放としては、少々電波の無駄遣いではないかなと。こういうこと言っはイケないのかな…。

**村上:** 厳しい。でもありがとうございます。

**会長:** ぜひNHKでないと出来ない番組、私もよく拝見しますが、民放がなかなか出来ない問題提起型とか、ぜひそういう方面に力を入れて頑張っ欲しいと思います。

## おわりに

**村上:** これから新しい時代、放送事業者も新しいサービスで今までの価値をより高めていくということも必要だと思いますが、これからどのようなことに取り組んでいけばいいと思われませんか?

**会長:** 放送ビジネスはある意味の成熟産業ですから、このジャンルの中で新しいイノベーションが果たしてどこまで出来るのかな、と思います。もし本当に何か新しいことをやろうとするならば、それこそネッ

トの世界の中で何か新しい事業を見つけられるといいなと思います。ただなかなか正直な所、どの局も見つかってなくて、皆、横並びで料金をとって配信サービスを展開したりしてますけど、これから先、ドラスチックに一勝負あるんじゃないかなとは思いますが。  
放送事業については、視聴者の皆さんが「あの放送局でないとこの番組見れない」と思うような番組を制作していくこと、そこに将来があると思います。

村上： ありがとうございます。

---

対談終了

---